

2009年12月23日勉強会議事録

課題本 E・H・カー『歴史とは何か』

発表者：石堂

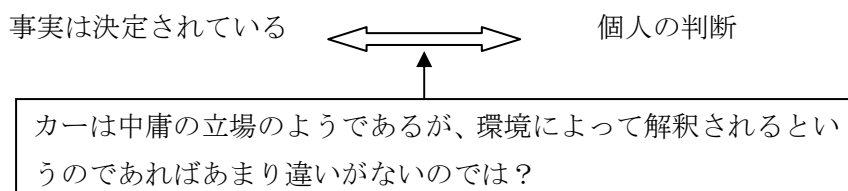
出席者：嶋田研・石堂・安達・十河晃・泉本・堺・中山・嶋田紫・久富

記録者：久富

第一章～第三章

○歴史家の解釈について

・歴史的環境や背景によって歴史が形成されるというならば、個人の考えは結局ないものではないかという疑問が出た。その整合性についてはどうなのか。



・そもそも歴史家の解釈は背景を抜きにして純粋なる個人の判断（解釈）ができるのか？個人の自由な判断というときの自由の意味は？という疑問について話し合った。

P122: “真面目な歴史家” …自分がこの人物の解釈を認めて、この自分の解釈を展開しているとわかっている人間。だから、超歴史的客観性を言っているわけではないということもわかっている。
⇒これが中庸

・自分がこの解釈の影響を受けていることがわかっているならば、またその影響を取り除くことも可能では？それこそが中庸な立場ということでは？という意見が出た。

⇒しかし果たしてそれがそんな簡単に可能なのか？

・どこまで背景から取り除かれた“自由な個人”が存在できるのか。そもそも環境に左右されない個人が存在できるのか・・・

○カーの運命観について

・カーは運命・宿命を否定しているが、p71 “不測の結果”と表現している部分もあり・・・そのあたりがどうなっているのだろうかという疑問が出た。

・中世・・・神の影響が強い⇔近代・・・神が不在の時代。そこを意識して対比しているのでは。

・神ではなく、人間のやることなので、予測できない部分があるということを言っているのでは。という意見が出た。

○自然科学と人文科学

・自然科学は原因と結果が確定しているが、人文科学は必ずしもそうは言えないのではないかと最近考えているのだと、発表者が問題提起してくれた。そういう意味では法律学も自然科学と言えるのでは・・・⇒法律学は自然科学とは言い難いのではという意見が出た。

・ここで、法律学についての解釈をメンバーが紹介してくれた。

法律学とは、その判断の背景にある価値観がゆれ動くので、自然科学と同一視することに対しては疑問を感じる、ある意味価値相対主義的などところがある…現行の制度についてはその瞬間は自然科学と言えるが、通時的に見たときにはそうではないので、自分科学的な面もあると思う。

○歴史の映像化！？

・この本で言うところの“歴史”は、字で書かれたものだと思うが、ではそれが映像になるというならばどうだろうかというメンバーからの投げかけが出た。

⇒これは、現代の価値観では容易に評価しきれないという意見が出、みんなで話し合う。

その時々でそれが一次資料になり得るものが多すぎる。今ではブログなど・・・

・南京大虐殺・アウシュビッツ等の事実のわかっていないものが映像資料によって明らかにされることがあるのでは。

⇒ではその映像はだれが作ったのか？

作り手がいる以上、資料批判に発展していくのでは。

・映像には日記や記述のように人の忖意が入りにくいのではないか・・・

事実しか見せないという意味では資料になり得るのではないかという意見が出た。

⇒映像はある部分だけをフレームに収めることが可能。ということは、その映像の写し手の意図まで掘り下げないと真実に迫ることができない。その部分を選択した時点で写し手の意図は何かしら入っているはず。

・インターネットやブログなど、映像資料が氾濫するにつれて、時代がくだるとその映像が残された意図もわかりにくくなるのではないか。手軽になりすぎたために無法状態。

・たとえば衛星から撮影した画像は客観的事実になるのでは？（この時間この場所に飛行機が飛んでいたなど…）

⇒⇒⇒ここから衛星から撮影すればどうなるかということについて話し合う。

・全世界的な記録を残したとして、その瑣末なものに意味があるのだろうか。歴史は歴史家が判断して残しているものだと思うので、ただ漠然と記録を残すことを歴史とは言えないと思うという意見が出た。

・例えば、腕を組んでいる堺くんが後に三本の指に入る偉人になったとすれば、記録していくことにも意味があるのではないか。でもそれは不確実なことだけ・・・

・ただ事実を残すことによって後世の人がその人物の情報を得たいと思ったときに有用になる。これは意味のあることではないかと思う。

・使う人間によって有用かそうでないかが決まるので、文字でも映像でも結局は同じなのでは・・・⇒そうならないために衛星を飛ばすという話になったのでは？（ループ？）

・考えてみると、衛星で記録をとるという事実が人々に認識されるとまたひとつの制限がかかってしまうのではないか。監視されているという事実の下で人々が行動するようになると、それはまた監視される以前と以後では行動が変わってくるのではないか。

四・五・六章

○p159 “伝統”とは？

この文脈でなぜ“伝統”という言葉が使われているのかということについて話し合った。

・人間が育っていく過程で情報を得て成人していくというような、教育的な意味では？
・伝統というと、 $A \rightarrow A \rightarrow A$ であって、 $A \rightarrow B \rightarrow C$ という進歩ではないから、どうも違和感がある。

・ $A \rightarrow B \rightarrow C$ と変わっていく中で、 B に行く段階だが、 A の性質を持ちつつ B へと変化していることを含めて考えると、伝統と言えるのではないかという意見が出た。

○五章の p196 “事実と価値との間の相互依存と相互作用”について

何が相互依存し相互作用するのかについて、話し合い、さまざまな意見が出た。ここで言う事実とは、衛星で記録したようなものではなく、歴史的事実のことという前提で・・・

・歴史家にとって事実は過去のもの、価値は現在から判断したものだとすると・・・事実と価値はそれぞれ過去と現在に置き換えられないだろうか。

・カー曰く・・・歴史は過去から決定されていると言うが、その先のことは自由の余地があるというように・・・見方が分断しているような印象を受ける。

・p212 “私の見るところでは・・・必要とあればこれを進歩という古風な名称で呼んでもよいと思うのです。” ⇒カーの歴史観が現れている？でも p172 “退歩の時代もある・・・” p173 “進歩が平等で同時的であることはない・・・” ともある。

・p212 にあるように、自分の環境を理解することが進歩？自分の置かれている環境と自分自身を理解する中で相互作用と相互依存が起こるのだろうか。

・例えば、かつて社会主義で失敗した経験があるにも関わらず、もう一度現在の価値観で社会主義に適応できると判断した時点で、再び社会主義に立ち戻るのであれば、それは進歩したと言えるのではないか。

・失敗したことをもう一度しないように判断することは新しい歴史家のほうがより客観的にできる。

・歴史とは・・・掃除機のコンセントを巻き込んでいくイメージ。過去を取り込んだまま進んでいく、過去を現在に引き戻すような・・・

⇒⇒⇒歴史家の客観性であり、歴史の進歩？

- ・カーの言う歴史に立ち戻ると・・・歴史とは過去との対話である！
- ・カーは英語圏の勢力の低下をイギリスの歴史家に警告している。いい気になってそこで満足していると足元をすくわれるぞ・・・と。

安達くんによる問題提起

◎P205 “哲学者たちはただ世界をいろいろと解釈してきたが、大切なのは世界を変えることである”・・・についてどう考えるか。

- ・哲学者＝学者と置き換えてみても意味のある文章。
- ・ここで言う世界とはどんな世界？自分たちの生きる世界なのか、全世界という意味なのかという疑問が出た。それに対し、ここで言う世界とは・・・自分の頭の中だけでなく他者に影響を与えることではないかという意見が出た。
- ・共産党の、労働者たちよ立ち上がれ的なスローガンではなく・・・この言葉を現代に置き換えたとき、哲学者は学者志望の人間がどうするかということと考えられるのでは。
- ・つまりは意思の力。研究室に閉じこもるだけでなく、そういう意思を持って生きることができるかどうか。
- ・専門家と学者の違い。専門家はただ調べるだけというイメージだが、学者は自分が学問の徒であることに誇りを持っているようなイメージ。
- ・学問や研究を閉じたものではなく、開いたものとして扱うべきという示唆では。

石堂くんによる“雑談”

石堂くんが研究を発表し、紹介して下さった。それについて話し合ったことなど。

- ・司馬史観…いわゆる、日露戦争までは良かった…について
⇒文学作品と割り切って読むのか、この世界観を受け入れるのか・・・
最近NHKなどにより司馬史観にシフトしていつている??
- ・マニフェストについて…原義は共産党宣言。今でこそポピュラーになり原義を省みられることのないこの言葉だが、当時浜口がこの言葉を使った意図とは!?
- ・ソフト・パワーについて